

一九二六年に六萬三千足、一九二八年に十七萬八千足、一九二九年十六萬九千足といふのであつたが一九三〇年に一躍三十萬九千足二十五萬ペソに上つた。本年上半期には五十二萬六千足に増加した、以て其の進出の速かなるを見るであらう、ヒッソムに最も需要のあるのは Canvas Rubber Shoes, Crepe Sole Canvas Shoes, Pum Shoes 等ヒカンベスは運動用、皮革靴の代用により白色のものが需用が多い、土民の生活が向上して洗足のものが増えたとこの靴をはくやうになつたから需用が増加し、労働者や下級民がスリッパの代用として眞黒の足に眞白のカンバスをはきだした。ストラップ付よりも紐付の方が氣受がよく、細型よりも太型が一般に向く、大人用は五、六の二種サイズがよくうれて、七、八、九は労働者又は地方向である、踵付ゴム靴はクレープソールに比し細型でスマートなのが喜ばれるポンプ靴は體裁がよく脱穿に便利ながら在留中國人に愛用される。

大阪と神戸がその輸出港で、マニラ、セブ、イロイロ、ダヴァオの各港に陸揚せられ、マニラが過半をしめる、ゴム底カンバス靴は同時に印度にも進出した、元來カルカッタではカナダ、英、米、三國の市場であつたが、數年前に比し本邦品はこゝでも一躍數十倍に上り、歐米に凌駕して第一位となつた一九二八―二九年に五十二萬七千九百足であつたのが其翌年に四百四萬三千七百足となり、本年五月のみで百三十七萬五千五百足(價格七十七萬三千五百留比)に達した。

質疑 應答

勿論全部がカンバスではなく、他の靴もあるが、その四割乃至五割は之に屬する、元來運動靴としての本品は、靴下の使用を好まない印度人の嗜好に適し印度製履物に比べても其價格が低廉で、且耐久性がある結果かやうに需要が大に進んだのである、しかし本邦品はカンバスと底との接合部が脆く離れやすい缺點があるので改良しなくてはならぬ。

本邦の商人は競争して一時に多數の賣込商人をつくつて、安ものをつかます弊が多い。この際當事者が注意して價を上げず同時に品質を低下しないで永遠の消費を心掛けてほしいと思ふ。

質疑 應答

問 米國の棉花と其の生産傾向。

(大阪 紡生)

答 米國農務局は一九三〇年春棉花の價格が下落すると、棉花統制協會を通じ一九二九年收穫の棉花約百三十萬バールを買上げ一九三一年七月迄之を市場に出さなかつたが、しかし一九三一年收穫豫想千五百五十八萬四千バールと發表されたとめ棉花の價格は愈下落した、蓋し生産過剰を憂ひて、一九三〇年春に既に棉花の作付面積を一割方減じたのに、實際右の數字が出て之を政府の持越分に合すと一九三一年の供給高は二千四百萬バールに達し、向ふ一年間に於ける世界の米棉需要高は千三百萬乃至千四百萬バールに過ぎないから、約一千百萬バールの棉花が、來年へ持こされ、それが更らに明

年の棉花製産界を壓迫するのである。そこで本年九月には現在生長中の棉花の第三列目を押返してしまへといふ提案を農務局から出した。しかし三分一の棉花畑をつぶすといふことは中々容易でない。

同時に米國の農務局が物價調節のために買上げた一千三百万バールの右の棉花と、小麦二億萬ブツシエルの處分に全く困窮しきつてゐるのは實際である。そこでこの棉花を獨逸へやすく掛け賣りにしやうと計畫したが、それも失敗に歸したらしい。

まづかうした事情で米國の棉花は生産過剩に困んでゐるのであるが、これを將來に救済する方法は第一に棉花の生産費を節減し、外國生産品に勝つやうにしなければならぬといふので、目下農務省で大にその對策を講じてゐるのである。

事實最近二十年間に諸外國の棉花消費高は五〇%以上も増へた、しかしこの増加分は米棉によつて補はれず、外國の生産品でまかなはれてゐたのである、ところがこの永い間に米棉は生産費が上騰し、しかも其品質は低下したのであつた。

二十年前一英反に付約百九十封度の産田を見たものが、現今では百五十封度餘に過ぎない、實に地力の減退が見えだしたのである。政府の調査によれば、南部諸州に於けるは過去二十年間に土地上層四寸乃至六寸を流失してゐるといふのである、米國の粗放な農業の様子がわかるではないか。之に反してロシア、印度、中華民國、エジプト等では農民の生活程度が低くいのであるから自らその價格を安く、新しい紡績國への棉花供給國となり、米棉に對する強敵となつてきたのである。そこで目下米國ではまづ棉の種を改良してステイブルの長い收穫率の多いものを作るやうに心がけ、畜産を副業として奨励し土壤改良のために、人造アンモニヤを安價に供給し葦科の植物を栽培して酸性土壤の改良をはからんとしてゐる、故に政府は酸性分の土壤に發育する葦科類約三百種を各國より蒐集し、南部諸州に試作して居るので、之を以て一面肥料とし一面飼料にしやうと企てゐるのである。

世界第一の棉花産出國でも、之を維持するためにいろ／＼の苦勞があるといふことを知るに足るであらう。(F)